



Title	スーリオ美学の根本問題
Author(s)	北田, 有亮
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/47114">http://hdl.handle.net/11094/47114</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	北 田 有 亮
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 20666 号
学位授与年月日	平成 18 年 9 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	スーリオ美学の根本問題
論文審査委員	(主査) 教授 大橋 良介 (副査) 教授 上倉 庸敬 教授 藤田 治彦

#### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、エティエンヌ・スーリオの美学を 5 章に分けて内在的に追跡し再構成する。

第一章「スーリオは生の問題から出発する」は、スーリオの出発点が「生」であることを確認するとともに、この「生」が「生きられた生」ではなくて「生きている生」であることを述べる。それは瞬間々々における生であるとともに、「esthétique な理性」によって、その本質的形式において感性的に捉えられる統一体でもある。

第二章「美学は形式の学である」は、生きている生の「本質的形式」が、通常の質料あるいは内容と区別された形式でなくて、素材を所有する形式、生きている生を可能にする形式、実体にささえられた、実在を含んだ形式であることを述べる。そしてその上で、スーリオ美学が個別の芸術現象ではなくて、このような「形式」を捉える学であることを、明らかにする。

第三章「芸術は創建である」は、スーリオの芸術観を取り出す。従来は「芸術は天才による創造」だという見方が支配的であったが、もともと神がおこなう「創造」という語を避けて、スーリオは、芸術家は「創建」(instauration)をおこなうと考える。そして、その行為は選ばれた天才だけがなすものではなくて、人間であるかぎりはその素質は具わると、考える。神が創造する世界は「不完全な世界」であり「世界は神の傷口」であるのに対して、芸術家は「創造(創建)することにより、不完全な自分を完全へと向かわせる。両者の行為は「循環する」という。

第四章「芸術作品は実在である」は、芸術作品において本質が実在を規定し、実在が本質を更新するという図式が、取り出される。これは、芸術家が作品のあるべき姿に作品の現実の姿を近づけるという面と、作品の現実の姿から触発されて作品のあるべき姿を模索するという面が、表裏するということでもある。その場合、芸術作品の魅力を「強度」(intensité)という概念であらわすことが、叙述の鍵となる。

第五章「芸術の宇宙」は、スーリオにおける作品の法則ないし論理を、スーリオ自身の比較美学の試みを通して取り出す。そこで明らかにされる論理は「構築的範疇」という名であらわされ、これによって「芸術の宇宙」が構想され、一種の宇宙論の展開が、あとづけられる。

最後に、「おわりに」と題して、今後の研究展望を含めて「いくつかの構想」が述べられる。

なお、全体の分量は、本文と注、目次、年表、等を併せて、400 字詰め換算 330 枚である。

## 論文審査の結果の要旨

スーリオ美学はフランス美学の嚆矢でありながら、これまで研究されることがあまりに少なかった。多少の研究文献はあるが、それらも概説にとどまっていると、著者は考える。そこでスーリオ美学を、その思想に特有の生成ダイナミズムに即して取り出すことが、著者の試みとなる。その問題意識はたしかであり、かつ独自性を蔵する。そこで、この着眼がどこまで裏づけられたかが、審査の眼目となる。

スーリオの思想は、特定のレッテルで特色づけることが難しいとされる。それは、彼の思想の出発点となる「生」が、もともと对象的に捉えようとしたとたんに「生きられた生」に変質し、端的な「生きている生」そのものではなくなることと、呼応する。そこで著者は、スーリオの思考に潜入し、そこに内在することによって、そのダイナミズムを内部から描き出すという手法を取る。この手法は全体としては成功しており、著者は五つの章にわたってスーリオ美学を描き出すに到る。五章の見出しはそのまま、著者が得た研究パースペクティブと見てよいであろう。すなわち「生」、「美学」、「芸術」、「芸術作品」、「宇宙（論）」である。五つのパースペクティブは、ひとつひとつがスーリオ美学の重要なアспектとして明確な意味内容を持ち、他方で五つ全体で有機的な全体をなす。だから読者は、この五章を読み進むことによって、スーリオ美学の輪郭と生成の動きを、おぼろながらも視野におさめることができる。このことは、著者がスーリオ美学のなかに入って、これを自家薬籠中のものにしていて、これを確かな仕方で叙述する力と綿密な思考力とを持っていることを、示している。

もちろん、このような内在的な手法が確かさを得ることは、それと表裏をなす問題点も生じる、ということである。すなわち、著者がスーリオ美学と自分とをほとんど一体化させた結果、スーリオ美学を突き放して客観的に見定めるということがあまりなされず、また近代美学のなかでスーリオ美学が占めるべき位置も、ともすると見えにくくなる、ということである。しかしながらこの問題は、克服がむずかしいというわけではない。すでに「おわりに」と題した末尾の章で、バルクソン、フォション、サルトルの三人の哲学者・美学者の思想をスーリオ美学と比較する作業が、構想されている。

以上から、本論文は大阪大学文学研究科の博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。